

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2690600172		
法人名	株式会社アマタ		
事業所名	グループホーム カノンしもがも		
所在地	京都府京都市左京区下賀茂松ノ木町64-50		
自己評価作成日	令和2年12月20日	評価結果市町村受理日	令和3年6月28日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/26/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&jiyosyoCd=2690600172-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 きょうと福祉ネットワーク「一期一会」		
所在地	京都市右京区西院久田町5番地		
訪問調査日	令和2年3月13日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

利用者主体に物事を考え食事等、可能な限り利用者の希望や意見を取り入れ臨機応変に対応している。また、定期的にイベントを開催し家族と利用者のコミュニケーションを多く取れるよう働きかけている。地域に向けては、行事への参加、及び、地域セミナーを開催する事により、積極的に地域に根ざしたグループホームになるよう努めている。同一敷地内の看護付小規模多機能施設の看護師、及び、作業療法士と連携し、内部研修の充実を図っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当該事業所は下鴨神社に近い閑静な住宅街にある2階建ての事業所です。2階が1ユニットからなるグループホームで、1階は看護付小規模多機能施設となっており医療的な連携ができることが強みといえます。職員の介護以外で得意な部分を活かせるように意見が反映され取り組んでいることが利用者の笑顔に繋がっています。1ヶ月に1回発行している家族への便り(カノン新聞)は、自筆で利用者自身のコメントや担当者のコメントが添えられています。写真は家族から笑っている写真だけでなく普段の表情が見たいとの要望があり、不機嫌な表情も掲載されています。事業所では「毎日がスペシャル」を企画して玄関前に貼りだして取り組んでいます。事業所独自のやり方を打ち出し、オリジナリティを追求しながら、常に利用者、家族本位のケアに取り組まれている事業所です。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族の2/3くらいと
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんど掴んでいない				4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある				2. 数日に1回程度
			3. たまにある				3. たまに
			4. ほとんどない				4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 少しずつ増えている
			3. 利用者の1/3くらいが				3. あまり増えていない
			4. ほとんどいない				4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 職員の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 利用者の2/3くらいが				2. 家族等の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが				3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない				4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が				
			2. 利用者の2/3くらいが				
			3. 利用者の1/3くらいが				
			4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
I.理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念を共有スペースに掲示している。 内容の理解・共有・実践については職員により温度差がある為、入社時のオリエンテーションで詳しく説明しそれに沿った個人目標をそれぞれ立てている。	仏教の慈悲と共生の精神のもと理念「慈悲のこころ」が掲げられるとともに職員行動規範として行動指針5つの柱が掲げられている。それらを基にした事業所の年間目標が定められ法人内の親睦会で各事業所が発表し合っている。職員はそれらに沿った個人目標を立て半年に1回面談で見直しをしてケアの実践に繋げている。	理念は事業所が運営やケアサービスを提供する上で拠り所としている所であり、常に立ち戻る考え方の原点といえます。職員の理解の温度差解消に次年度の課題としてサブタイトルを考えると伺いました。職員の皆さんと共により良いケアの実践に繋がるようなものを策定されることを期待します。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	年間行事計画に地域の行事を組み込み交流していたが今年はコロナ禍で機会は減ったが毎年、地蔵盆や運動会など積極的に参加している。	町内会に加入するとともに地蔵盆では事業所の玄関前のエントランスを音楽演奏やスイカ割の場所として活用されている。玄関前には移動焼芋屋に来てもらったり、外椅子を開放して交流を図っている。また学区の運動会には職員が参加し利用者が応援に行くなど交流している。新型コロナウイルス感染症が終息したら近隣の幼稚園とも交流したいと考えている。今後は事業所内の中庭を通り抜け通路として開放することも考えている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	同一事業所内の看多機と連携し地域の利用者の割合も増えているが今後は開かれたスペースの機会も必要と考える。(認知症カフェ等)。一昨年は小学生向けの認知症サポーター講座に参加し地域住民の認知症の理解に努めている。			
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	議事録は玄関に開示いつでも誰でも見る事ができるようにしているが、全職員への周知には至っていない。運営推進会議での内容を受けてできる限りサービスに反映している。	運営推進会議には、家族代表、地域の社会福祉協議会と民生児童委員協議会、京都市左京北地域包括支援センター(高齢サポート)、老人福祉員、GH連携医への呼びかけで開催され、事業所の報告や地域との連携についてなど意見交換している。年1回くらい看護職の参加があり、医療面での、転倒防止、感染症、ターミナルのこと等を話す機会となっている。議事録はファイリングされて誰でも見られるように玄関に置かれている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議議事録を区に提出し必要時には包括と連携している。	行政に運営推進会議の案内、議事録を届けている。運営推進会議には、京都市左京北地域包括支援センター（高齢サポート）の参加があり情報を共有するなど連携している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月のケア会議で身体拘束（センサー）評価を行い毎年内部研修で具体的事例を通じて話し合いを重ね身体拘束をしないケアへ落とし込んでいる。施設内は移動自由だが玄関はテンキー施錠となっている。	骨折転倒が続いた経緯があり、抑制ではなく見守り、リハビリのためとして家族の同意のもとセンサーマットの使用や眠りスキャンを一部試験的に導入している。使用については管理者が問題意識を持ち、ケア会議で評価を行いながら考え続けている。虐待の芽チェックリストを活用し、職員が集計、分析を行ったところ効果的であった。スタッフのストレスマネジメントにも繋がる大きな気づきとなっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	2か月に一度会議内で議題にあげている。利用者より苦情をうけ夜間常カメラをつけた時期があった。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	・法人内の研修を成年後見制度について講師を招き一部の職員は学んでいる。 ・実際利用する方が少なく学ぶ機会が少ない。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に管理者、ケアマネより行っている。改定時には書面にて通知および口頭で説明し合意の上捺印をいただいている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を玄関に設置している。定期的に家族へのアンケート調査を行ない反映に努めている。日々の面会時のお話の中からも吸い上げるようにしている。	年に1回開催される家族会の時にアンケート調査を実施している。結果は集計して分析し経営会議で公表して反映に努めている。面会時に聞き取るよう努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に1回PCS(ケアスタッフ)会議を開催し解決すべき課題に対し職員全員の意見を聞き運営に活かしている。定期的な面談や日頃からのコミュニケーションの中で困りごと等の把握に努めているが反映には繋がっていない。	年に2回、リーダーが個人面談を行い、管理者へ報告をしている。気になることがあれば管理者が直接話を聞くようにしている。職員の介護以外で得意な部分を活かせるよう取り組んでいる。例えば、手芸が得意な職員が前回の評価後、殺風景であった壁に利用者と一緒に壁の飾りを作ったり、料理の得意な職員がコロナ禍に食の楽しみを提案して実施したり、20代の職員の感性を活かして車イスの方にフロアで達成するとご褒美がもらえる「足こぎスタンプカード」を発行するなど利用者の笑顔に繋がる意見が反映されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	各職員が年度毎に目標を立て達成に向けた具体策を挙げている。残業は極力しなくてもいいような業務分担を目指しているがいまいち現場職員には伝わっていない。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者は外部研修を積極的に活用するよう進めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	あまり機会がない。		

自己 評価	外部 評価	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	生活歴や既往歴を把握した上で本人のニーズを引き出しケアプランを作成、関係作りに努めている。本人からの話を十分に傾聴するよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	概ねできている 利用者の認知症が進んでいる場合、本人よりも家族の思いが優先される場合もある。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	施設内だけのサービスで完結するのではなく柔軟に対応している。アセスメントを十分に行ない様々な職員と課題の分析に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家におられた時と同じように出来ることは自分でしていただける関わり、関係性を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	受診の同行やイベントへの参加、一時帰宅の協力など共に支えあいそれぞれの日常生活が成り立っている。小さなことでも話ができる関係を目指している。職員の異動が多く信頼性に欠ける場面もある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	機会は少ないが努力している。	入居者は地域の方が多く、コロナ禍前は友人宅へ遊びに行ったり、ホームへ来られたりしていたが、コロナ禍の現在は、手紙や年賀状の送付を手助けするなどの支援に努めている。入所前の行きつけの美容院、お店への訪問は、個別対応している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	関わりあることで認知症の進行を遅らす効果を感じる。一人一人の能力にあったことを行なって頂きチームワーク作りに努めている。利用者の多くがリビングで過ごすことが普通になっている。皆の輪に入ることを苦手とする方には不快に感じないよう環境を整えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	利用終了したご家族から感謝の声を多く頂き、その後も気軽に連絡が取り合えるように努めている。ボランティアで来て頂くなど関係を継続している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	パーソンセンタードケアの実践。個別ケア時思いを傾聴し希望や意向を把握し職員間で共有している。本人から聞き取りが難しい場合は家族に相談、協力を得ている。	研修においてセンター方式、ひもときシートの活用方法を学び、実践に活かしている。担当制としていることから、思いや意向を把握するツールとして活用している。見るものが違えば、感じるものが違うという気付きになり、ケアへの方向転換ができた。支援しながら本人、家族から聞き出すことに努め、聞き取った情報はケア会議で共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	概ねできている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日々の申し送りや記録、ケア会議などの中から把握に努めている。必要時はケア経過表や熱計表など独自の記録様式を用いて分析している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	多職種連携を介護計画に組み込み多様性のある計画を作成している。	医師、看護師、作業療法士の意見を個別に聞いておいて集約、共有しているため、問題が直ぐに解決しやすくなっている。3か月に1回ケアプランにサインをもらうため家族が来所された時に今後のことについて話す機会としている。モニタリングは3か月に1回実施している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	タイムリーな記録、情報共有に努めている。すべてが実践に活かしている訳ではないが将来的には実践に反映できることを目指している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	事業所内であらかじめ決められているイベント等以外でも日々の隙間時間に近所のコンビニや喫茶店に行くなどの個別支援に繋げ、その時々ニーズに答える努力を職員一丸となっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	概ねできている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	関係は良好。状態変化時は臨機応変な医療を受けられるよう連携できている。	入居時に本人、家族に従来のかかりつけ医か事業所の協力医か希望を聞き決定している。事業所の協力医が従来のかかりつけ医である方が多い。往診と受診は半数くらいとなっている。受診は家族に対応してもらっている。情報共有は電話や手紙で行っている。歯科については月に1回衛生士とともに訪問してもらい全員が受診している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	一階に看護小規模多機能があり看護師と協働しスムーズな支援ができている。夜間のオンコール体制も整っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	退院時には退院前カンファレンスにて地域連携室との関係作りを行なっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	今年度より早い段階での意志決定支援（ACPの取り組み強化）として、もしばなゲームや毎日質問など独自のツールを使い行なっている。家族や主治医等多くを巻き込みチームで終末期に向けた支援をしている。ターミナルケアは充実している。	看取り介護（ふたば）のフローチャートを作成し、入居時に重度化の指針を説明している。日々のケアの延長に看取りがあるとして独自のツール（もしばなゲーム、毎日質問など）を活用して記録している。家族へは電話、メールなどで細目に説明をしている。家族、医師看護師、ケア担当者がチームとなって話し合いを重ね意見をまとめてより良い看取りを実現するように努めている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	フローチャートを作成、それをもとに定期的な勉強会や訓練を行なっている。一様ではなくその時々で適切な対応ができるよう緊急連絡先など職員がすぐ見られるようわかりやすく掲示している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	防災委員会を立ち上げ毎月訓練を行なっている。今年度はコロナで消防署の立ち入り訓練はできていない。	併設の看護付き小規模多機能と連携して防災委員会を設置し、1年に1回、意識付けとして消防の立ち入り検査を実施している。また年に1回AED訓練を実施している。その際には地域の方にも案内している。月に1回、事業所の「毎日がスペシャル」企画で「防災の日」を設け、マニュアルを使いながら様々な訓練を実施し常に注意喚起を図っている。備蓄は防災委員の管理で外の倉庫に3日分常備されている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	毎年内部・外部研修で見直す機会を設けているが、言葉使いに関しては職員により出ている、出来ていないがはっきり分かれている。個別での指導も加え改善に努めている。	人格の尊重、プライバシーの確保について入職時の研修と年に1回見直しの研修を実施している。言葉遣いに関して問題のある職員には気付きとなるよう外部研修(スピーチロック、アンガーマネジメント、虐待防止)を受講後に伝達研修を担当してもらうなど注意喚起と改善を図っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	・できる限り自己での選択や決定の場面を作るよう心掛けている。 ・言葉にできない方の聞き取りが課題であるが、表情や態度からもくみ取れるよう観察力を養う。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	・毎日決められたことをするのではなく出来るだけその日の希望をかなえられるよう努めている。 ・職員主体になってしまうことも多い(マンパワー不足による)。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	・入浴時に衣類を選ぶ、一人で難しければ職員と一緒に選ぶなど行なっている。 ・美容の日をつくり化粧をすることで精神的にも落ち着かれる場面も出ている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	概ねできている。 月1回のカレーの日が定着してきた。皆で野菜の皮むきから盛り付けまで個々の能力にあった役割分担をし皆で作って食べていた。お酒も飲んで頂いている。	利用者の手書きのメニューが掲示されている。調理師が材料を発注し、昼食と夜食を手作りしている(朝食は夜勤者が担当)。利用者一人ひとりのできることを手伝ってもらっている。特別食として誕生日に希望の料理や行事食を取り入れている。コロナ禍、ホーム内で楽しいことを職員と考え、料理の得意な職員の提案で食の楽しみとして皆で焼き肉や串揚げを実施した。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	タイムリーにミーティングをし食事形態の見直し、変更、評価を行ない出来るだけ最後まで経口摂取できるよう支援している。必要時には栄養管理師に相談している。水分が進まない方には好きな飲み物やゼリーに替えて提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	・月1回の訪問歯科で定期的にメンテナンスを行なっている。本年度は歯科医による勉強会を依頼し実施して頂けた。 ・起床時、毎食後行なっている。声かけと介助を交え本人の力を活かせるようにしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	・利用者一人一人の排泄の間隔を理解し失敗が減るよう適切なタイミングでの声かけ、誘導に努めている。日中は基本的にはトイレに座っていただく習慣が出来ている。	利用者の一日の排泄パターンを担当職員を中心として個別に把握し、職員間で共有している。声掛け、誘導は本人の日頃の様子からそのタイミングを見計らって行い、本人の自尊心を損ねないよう心がけている。個別の状況によって使用するパットを変えている。夜間は、眠りスキャンで把握して声掛けを行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	・便秘体操を取り入れたり、腹部マッサージ、便通をよくする食品(ヨーグルト、牛乳、メイバランス等)の提供などそれぞれ個々にあった方法を試している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴日は曜日で固定されているが、その日の体調や気持ちを考慮して順番を入れ替えたり明日に変更する等対応している。前回の課題であった夕方入浴を実施したが直接的な満足度には繋がらなかった。入浴そのものを楽しめるよう努力している。	3日に1回入浴日は決まっているが、本人の体調、気分を優先して柔軟に対応している。基本的に同性介助とし、着替えのサポートなど職員が側につくようにしている。柚子風呂や、歌の好きな方には歌ってもらったり入浴を楽しめるようにしている。一対一になることで深い話ができる機会としている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	・自立の方は自身のペースで休息出来る。 ・就寝時間を決めず眠れないときは無理に寝てもらうことはせずリビングで眠くなるまで過ごして頂いている。 ・眠りスキャンの導入		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	・リーダーはきっちりと把握しているが副作用まで理解している職員は少ない。 ・常に処方内容が確認できるようお薬リストをファイリングしている。処方内容変更時は申し送りノート、口頭にて共有している。服薬前は職員間でダブルチェックし誤薬防止に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	・馴染みの家事(食器洗い、拭き、配膳等)は毎日の日課として定着している。 ・本年度は特にレクリエーションが盛り上がった。頻度も増えた。 ・ビールや日本酒、ご家族からの馴染みのお菓子などを定期的に提供している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	・誕生月には希望にそった外出を企画している。家族や併設の看護小規模多機能施設スタッフと協力しマンパワー不足を補っている。 ・隙間時間を見つけて近所を散歩、中庭で花を摘む等外気を吸える工夫をしている。	下鴨神社や糺の森が近隣にあり、日常的に散歩、森林浴を楽しんでもらっている。ホームの中庭にテーブルと椅子、大型の parasol を置いて園芸好きの職員によって植木や花等えが設えられ、短時間でも戸外で過ごせるよう工夫している。誕生月の希望に添った外出をする際は、家族に任せたり同敷地内他事業所職員の協力を得ている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の預かり、本人の要望時にお渡ししている。職員と一緒に買い物に行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話はいつでもかけて頂けるようにしている。自身で年賀状を書いて頂く支援は毎年している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	・以前の課題で白い壁は病院のイメージがあるとのことを受けて毎月利用者と職員で季節を感じる壁紙(飾り)を作っている。 ・植物を置きグリーンを取り入れている。	共用リビング正面の壁には利用者と手芸を得意とする職員とで作られた季節の飾りつけが施され華やいだ雰囲気となっている。利用者が花をいけたり、お茶を淹れておもてなしされることもある。また、利用者同士で読み聞かせをする様子などは、居心地よく過ごされていることがうかがえる。換気のチェックなど感染症対策に努めている。	トイレと浴室が隣り合っているため、相互のプライバシー確保に暖簾を付けるなど工夫されてきてはいいかでしょうか。

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	・個々の生活リズムで思い思いに過ごされている。 ・食席は相性もあり利用者間でトラブルにならないように気を配っている。 ・棚の本やゲームが自身の意志で使えるように工夫が必要。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	・自宅から持参された愛用品に囲まれ居心地よい空間作りを意識している。使い慣れたもので安全に配慮している。	居室内は整理整頓され、なじみの家具も置かれ居心地よく設えられている。居室の入口には写真やカノン新聞が貼られており、名前の字が読みづらくなっても自分の部屋とわかるよう工夫がされている。担当職員と一緒に部屋の掃除をしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	・各居室の入り口表札は写真付きで自分の部屋だと認識できるようにしている。 ・介助用トイレにテーブル状の手すりをつけ転倒予防に繋げている。		